



Title	台湾における漢族「日本語人」のアイデンティティについての研究：日本語サークル「友愛グループ」を題材に
Author(s)	杉本, 麗華
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58300
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【7】

氏名	すぎもと れい か 杉本麗華
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 24640 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	台湾における漢族「日本語人」のアイデンティティについての研究ー日本語サークル「友愛グループ」を題材にー
論文審査委員	(主査) 教授 北村 卓 (副査) 教授 伊勢 芳夫 准教授 難波 康治

論文内容の要旨

本論文は、台湾の老年層にあたる「日本語人」が形成される過程および彼らのアイデンティティの特性について、日本語愛好サークル「友愛グループ」を手掛かりに考察を行ったものである。

現在（2010年、以下同様）、台湾には日本統治時代に生まれ、植民地教育を受けた人達、いわゆる「日本語世代」が残存している。彼らの年齢層は少なくとも72歳以上であると推測される。この「日本語世代」の中には、今もなお日本語を使用している人達がいる。本研究では、彼らのことを詩人 大岡信の造語を借りて「日本語人」という表現を使うことにする。彼らの存在は現在、台湾社会の一現象として反映されているが、この社会現象はいずれ消えていき、彼らの歴史上の存在価値は薄れていくものと思われる。そこで、本研究では、この「日本語人」について調べるために、当時7人の「日本語人」で結成された日本語サークル「友愛グループ」（設立年：1992年）を題材に、彼らの記憶に残っている植民地経験と植民地後の体験についての調査を行った。

台湾は、その400年の歴史において、常に外来政権による侵略（植民）を受けてきた。つまり、日本が宗主国として台湾を統治したときも、台湾はすでにポスト植民社会の中にあっただろう。このような事実を鑑み、ここでは、ポストコロニアリズムの視点で、「日本語人」（ポストコロニアルの産物〔社会現象〕）を検討する。元来ポストコロニアリズムは「西洋対非西洋」という軸での論考が一般的であるが、本研究では、このポストコロニアリズムをより明確にしたエドワード サイドおよびホミ バーバの基層部に着目することにする。その基層部にある主張とは、西洋にしる、非西洋にしる、その基本的な構造は、「支配者对被支配者」（支配側が優れていて、被支配側が劣る）という視点である。本研究では、同じポストコロニアリズムではあるが、「非西洋対非西洋」という支配の構図から「日本語人」について分析を試みる。

「日本語人」は台湾各地に居住しているが、最も密度の高い地域は何とんでも人口が一番多い台北である。その台北には「日本語人」のサークルも多く存在する。その中で、現在最も日本のマスコミに取り上げられているのは台湾最大の日本語愛好サークル「友愛グループ」である。同サークルの143人の会員（現在）のうち、戦前生まれの台湾人は101人もいる。しかし、このサークルは今もなお私的な団体という体裁をとっている。当会の活動としては、定期的な月例会の開催、年1回の同人誌の出版および日台交流の活動へのサポートを行っている。そこで、本研究では「日本語人」の形成とその特性を解明するために、まず、同サークルの同人誌『友愛』を手掛かりとして文献調査を行う。そして、これらの文献にみられるエッセイから得られたそれぞれの記憶の一こまを、全体としてより脈絡のあるものとして関連づけるために、インタビュー調査を行う。さらに、インタビューのデータから仮説を設け、同サークルの「日本語人」のアイデンティティの特性についてアンケート調査を行う。

現在、「友愛グループ」が出版している同人誌『友愛』（私家版）の数は11冊にのぼる。このエッセイには「自伝史」的な内容（体験談）が多く書かれているだけでなく、植民地期や戒厳令下での見聞の証言もあり、同年代の会員との共鳴を深めるものとなっている。そして、同誌には、いま台湾の抱えている社会問題に限らず、今日の日本のそれについても関心をもち、評論しているものもあり、同誌を通して彼らの物事への見方が窺える。したがって、ここでは、この『友愛』から、投稿者の特徴を把握するとともに、「日本語人」のアイデンティティの特性について検討を行う。

さらに、「日本語人」が生きてきた日本統治時代および国府統治時代という2つの異なる外来政権の彼らに対する影響を知るために、インタビューとアンケート調査を用いて考察を行う。つまり、この2つの政権下で、彼らがどのような生き方をしてきたかは、彼らのアイデンティティに深く関わっていると考える。そこで、ここでは、ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、文化アイデンティティおよび言語アイデンティティという4つの観点より、その特性について検討を行う。

最後に、本研究のまとめを行う。本研究では、「日本語人」のアイデンティティの形成は、基本的には、彼らの成長環境および植民地期における生活体験に基づくものであるということが明らかになった。まず、彼らの言語アイデンティティの特性はベースとして日本語の言語能力をもつと同時に、併せてエスニック言語という帰属の言語も使用するという、いわゆる「併用形」である。次に、エスニック・アイデンティティにおいては、彼らの暮らしは伝承されてきたエスニックの習慣を守っている。これらのことを時間軸でみると、言語アイデンティティとエスニック・アイデンティティは時代の変化によっても変わらない。一方で、実際の生活や文化の面における心の拠所は日本のそれと深く関わっているのである。彼らのこのような生き方を、ナショナル・アイデンティティの側面からみると、一部の人は植民地期では日本人意識が強かったとみるであろう。しかし、彼らは植民地終結後、その日本人としての意識から中国人としてのそれに切り替えることにさまざまな逡巡があったため、台湾人のそれを持つに至っている。最

後に、ポストコロニアリズムに関しての見解は次のとおりである。「友愛グループ」の「日本語人」は、植民地による統制が65年前に終結した今もなお、元植民側の日本とよい関係を保っている。このような社会現象は平和的な共存現象（関係）をみせている。このことは、サイドやバーバの主張とは異なっている。すなわち、彼らは日本植民地期と国府統治期という激動の歴史により人生が翻弄され、とくに、植民地期の皇民化政策によって彼らは日本人になるように仕向けられたのである。この歴史の事実は到底看過できない。彼らは、植民地期ではまさに「日本的な」台湾人であったが、台湾社会の変動とともに次第に、「日本語人」と化していく。これは彼らがその社会とうまく調和しながらも、最終的には自らによる意思決定を尊重してきた証であると考ええる。この事実は、従来のポストコロニアリズム（統治者对被統治者）の解釈に新たな視野を持たせるという意味で新たな知見であると考ええる。

論文審査の結果の要旨

1895年から1945年まで50年の間日本の統治下にあった台湾では、現在でも日本語による教育を受けたいわゆる「日本語世代」が存在する。その世代の中には、いまなお日本語をコミュニケーション言語として使用し、日本語で書かれた文章を収めた雑誌を発行するなど、積極的な活動を行っているグループがいくつかある。筆者は本研究において、大岡信の表現に従いそれらの人々を「日本語人」としううえで、中でももっとも規模が大きかつ活発な活動を台北で行っている日本語サークル「友愛グループ」を取り上げ、その機関誌「友愛」に投稿された文章を分析するとともに、構成員に対してアンケート調査を実施し、またその中心的なメンバーにインタビュー調査を行うなどして、彼らの個人史についての詳細なデータを収集している。すなわち、本人の学歴や親の職業、学校における教育内容、日本人教師や級友との関係、家庭と学校における言語使用状況等々から、今日までどのようにして、またなぜ日本語能力を維持してきたのかに至るまで幅広く調査している。

以上に加え、日本植民地期の台湾に関する研究や台湾の近現代史、言語使用に関するこれまでの研究成果を踏まえつつ、さらにポストコロニアリズムの観点なども援用しながら、日本語人の形成を広く歴史的な視野からも位置づけている。こうした文献調査とフィールドワーク調査の双方から、筆者は、日本統治時代から戦後の中華民国政府による日本語使用禁止の時代を経て、日本語使用が自由となった現代へと至るといった流れのなかにおいて、日本語人の言語・民族・国家に関するアイデンティティが、様々な影響を受けながら複雑に変化しつつ形成されてきた実態を明らかにしている。

このような「日本語人」に関する先行研究はほとんど無きに等しい。また現在彼らは老齢にあり、いずれ近い将来、消え去る運命にある。このような状況の中で、直接に聞き取り調査やアンケート調査を実施し、それに基づいて日本語人のアイデンティティの形成について論じた本研究は、きわめて重要な意味を有するものといえる。ただし、論文の構成、論拠の提示、方法論に関する省察等についてやや不足する点も認められるが、本論文全体の価値を損なうものではない。以上のように、審査委員会は本論文を、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。